

言語小論 ④

大 森 孝

On relation between language and society

◎ 言語と社会について

我々が住んでいる此の社会に於て、人々との関係をつくり出す言語の働きを考える時、如何に言語と社会が、密接な関係にあるかを理解出来ると思う。この事に関し、言語学者ピーター、トルージル (Peter Trudgill) 及び、マデイロン E. ヘザリングトン (Madelon E. Heatherington)⁽¹⁾、フィリップ、エス、デール (Philip S. Dale)⁽²⁾ 等の説を参照しながら、論を進めて行く次第です。
⁽³⁾

~~~~~  
先ず、ピーター、トルージルの説を、参照しながら考えてみたいと思う。

彼は言語と社会の関係について、次の様に述べている。

The two aspects of language behaviour are very important from a social point of view : first, the function of language in establishing social relationships, and, second, the role played by language in conveying information about the speaker.

We shall concentrate for the moment on the second 'clue bearing' role, but it is clear that both these aspects of linguistic behaviour are reflections of the fact that there is a close inter-relationship between language and society.

即ち、和訳すると、「言語活動の二つの面は、社会的立場から非常に重要である。即ち、第1に、社会関係を作り上げる事に於ける言語の作用であり、第2は、話し手について情報を伝える事に於ける言語の果たす役割である。我々

は少しの間、第2の‘手掛り提供’の役割について心を集中するが、しかし、言語活動の此等の2つの面は、言語と社会の間に、密接な相互関係があろうと云う事実の反映である。」

彼は、以上の様に述べて、言語と社会が、非常な密接な関係にある事を述べている。

先ず、ダイアレクト(地方語階級語) (dialect) について考えてみたい。

ダイアレクトには、地理的背景を持つ場合と、階級的背景を持つ場合とが考えられる。現在の日本に於ても、地理的背景による方言は、しばしば認めるところであり、例えば、東北弁、九州弁、甲州弁の如くである。階級的背景による言語は、現在の日本に於ては、少数になって来ているが、未だ、多少残っていると思われる。

尚、此のダイアレクトに関し、彼は、ドイツ語とオランダ語の例を上げて、次の様に述べている。

Dutch and German are known to be two distinct languages. However, at some places along the Dutch-German frontier, the dialects spoken on either side of the border are extremely similar. If we choose to say that people on one side of the border speak German and those on the other speak Dutch, our choice is again based on social and political rather than linguistic factors.

即ち、「オランダ語とドイツ語は、はっきりと区別される言語であると知られている。けれども、オランダとドイツの国境に沿う或る場所では、その国境の両側で話されるダイアレクトは、非常に似ている。もし我々が、境界の一方の側の人々がドイツ語を話し、他の側の人々がオランダ語を話す理由を定めようとするならば、その決定は、又、言語的要素よりむしろ、社会的、政治的要素によって定められる。」

次に、彼等の理解 (understanding) について、彼は次の様に述べている。

We could say that if two speakers cannot understand one another, then they are speaking different languages. Similarly, if they can understand each other, we could say that they are speaking dialects of the same language.

即ち、「我々は、もし、2人の話し手が、お互いに理解出来ないならば、其の時、彼等は違った言語を話している、と云えるであろう。同様に、もし、彼等がお互いを理解出来るならば、同じ言葉のダイアレクトを話していると云えるであろう。」

彼は以上の様に述べているが、では相互理解の基準は、如何になっているであろうか。彼はこの事について次の様に述べている。

The criterion of mutual intelligibility, and other purely linguistic criteria, are, therefore, of less importance in the use of the terms 'language' and 'dialect' than are political and cultural factors of which the two most important are autonomy and heteronomy.

即ち、「相互理解の基準と、他の純粋な言語基準は、それ故、ランゲージとダイアレクトの使用の場合、その自律と他律が最も重要である政治的文化的要素より、重要さは少ないのである。」  
(4) (5)

尚、言語を区別する場合の規準を如何にするかの問題の困難さについて、彼は次の様に述べている。

The discussion of the difficulty of using purely linguistic criteria to divide up varieties of language into distinct language or dialects is our first encounter with a problem very common in the study of language and society-the problem of whether the division of linguistic and social phenomena into separate entities has any basis in reality, or is merely a convenient fiction.

即ち、「様々な種類の言語を、はっきり区別出来る言語やダイアレクトに別

ける為に、純粹に言語的基準を使う事についての困難さについての議論は、言語と社会の研究に於ける非常に一般的な問題に、最初に遭遇すると云う事である。即ち、言語的及び社会的現象を、夫々の実体に区別する事は、実体に何か基準をもっているか、又は、単に便宜的働まであるかどうかの問題である。」

以上の様に、彼は述べているが、結局、実体の性質そのものにより、言語及び社会的現象が定まってくると云えよう。

更に、具体的例として、カナダ英語と、アメリカ英語との違いを考えた場合、その区別を見つける事は困難であるとして、彼は次の様に述べている。

We can talk, for example, about 'Canadian English' and 'American English' as if they were two clearly distinct entities, but, it is in fact very difficult to find any single linguistic feature which is common to all varieties of Canadian English, and not present in any variety of American English.

即ち、「我々は、丁度二つのはっきり区別されたものであるように述べる事が出来るが、しかし、カナダ英語の凡ての種類に共通であり、どんなアメリカ英語の種類の中にも現われていない何か一つの言語の特徴を見つける事は、実際非常に困難である。」

結局、ダイアレクトと云うのは、語と語の間の単語や、文法の違いに関係していると思われるのであり、更に、ダイアレクトの中には、標準英語として知られているダイアレクトもあるのである。この事に関し、彼は次の様に述べている。

In many important respects this dialect is different from other English dialects, and some people may find it surprising to see it referred to as a dialect at all. However, in so far as it differs grammatically and lexically from other varieties of English, it is legitimate to consider it a dialect: the term dialect can be used to apply to all va-

rieties, not just to non-standard varieties.

即ち、「多くの重要な点で、此のダイアレクトは、他の英語のダイアレクトとは違っている。或る人々は、其の語がダイアレクトに関係している事を知って、全く驚くかも知れない。けれども、其れが他の種類の英語と、文法的に、辞書的に違っている限り、其れをダイアレクトと考えるのは合法的である。其のダイアレクトと云う語は、正に非標準の種類語ではなくて、凡ての種類に対して適用するのに用いられるのである。」

以上の様に、彼は標準英語として用いられているダイアレクトについて述べている。

### ◎ Standard English (標準英語) について

では標準英語とは、どんな語であろうか、彼は次の様に述べている。

Standard English is that variety of English which is usually used in print, and which is normally taught in schools and to non-native speakers learning the language. It is also the variety which is normally spoken by educated people and used in news broadcasts and other similar situations.

即ち、「標準英語は、平常、印刷に用いられ、又、普通、学校や、言語を学ぶネイティブでない話し手に教えられる英語の種類である。其れは又、教育ある人々に普通話され、そして、ニュース放送や、他の似た様な事柄に用いられる種類である。」

では、標準英語は如何にして生れて来たのであろうか。この事について、彼は次の様に述べている。

Historically speaking, the standard language developed out of the English dialects used in and around London as these were modified through the centuries by speakers at the court, by scholars from the

universities and other writers, and later on, by the public schools.

As time passed, the English used in the upper classes of society in the capital city came to diverge quite markedly from that used by other social groups and came to be regarded as the model for all those who wished to speak and write well.

即ち、「歴史的に述べれば、標準英語は宮廷に於ける話し手や、大学の学者や、他の作家や、後にはパブリック、スクールによって、何世紀も修飾されて来たが、ロンドン市内や、その周辺で使用された英語のダイアレクトから発達して来た。時の経過と共に、首都の上流社会に於て用いられた英語は、他の社会のグループによって用いられた英語とは、全く非常に離れるようになった。そして、上手に話し、書こうと願う凡ての人々に対するモデルとして考えられるようになった。」

以上の様にして、彼の云うように、標準英語は発生して来ると考えられるのであるが、後に印刷術等が発達するにつれて、更に、広く用いられるようになるのであり、この印刷術の広まりについて、彼は次の様に述べている。

When printing became widespread, it was inevitably the form of English most widely used in books, and although it was undergone many changes, it has always retained its character as the most widely accepted form of the English language.

即ち、「印刷が広まって来た時に、其の英語は、必然的に本等に最も広く用いられる英語の形になった。そして、其れは多くの変化を経たけれども、其れは常に最も広く受け入れられた英語の形として、其の性格を常に持っている。」

以上のように、印刷の広まりが標準英語なるもの、発達を非常に強くしたと考えられる。しかし、標準英語の中にも、少こしの地域的差異が認められるのであり、この事について、彼は具体的に次の様に述べている。

Standard Scottish English is not exactly the same as standard Eng-

lish English, for example, and standard American English is somewhat different again.

即ち、「標準スコットランド英語は、例えば正確には、標準イングランド英語と同じではない。そして、アメリカ標準英語は、又、少し違っている。」

そして、次のようなよく知られている語や文を上げている。

ブリティッシュのリフトは、アメリカではエレベーターである。又、次の例を上げている。

|                            |                              |
|----------------------------|------------------------------|
| { British : I have got     | { English : It needs washing |
| { American : I have gotten | { Scottish : It needs washed |

又、同じイングランドでも次の差異がある。

North : You need your hair cutting

South : You need your hair cut.

以上のように彼は述べて居り、標準英語の云われているものの中にも、地域的に多少差異が認められるのである。結局、標準英語について、彼は次のように述べている。

Standard English has a widely accepted, codified grammar and vocabulary. There is a general consensus among educated people, and in particular amongst those who hold powerful and influential positions.

即ち「標準英語は広く受け入れられ編まれた文法と単語を持っている。教育を受けた人々、そして殊に、有力な、他に影響を与える地位ある人々との間には、一般的なコンセンサスがある。

以上のように彼は、標準英語を定義づけているが、では、標準英語の発音について考えてみると、彼は、一般的に認められた標準の英語のアクセントはないが、しかし、地域的アクセントを持つ標準英語を話す事は、少なくとも理論的には可能であるとしており、具体的に次のように述べている。

In practice there are some accent, generally very localized accents

associated with groups who have had relatively little education, which do not frequently occur together with Standard English, but there is no necessary connection between standard English and any particular accents.

即ち、「実際、比較的教育の低い人々に関係する一般的に、非常に地域的アクセントがある。このアクセントは、たびたび、標準英語と一緒に起る事はない。又、標準英語と、何か特別のアクセントの間に、必要な関連はない。」

以上のように彼は、標準英語とアクセントとを分離して考えているが、ただ、標準英語と丈け一緒に起るアクセントがあり、これは R. P (received pronunciation) と呼ばれ、別名, the British English accent, 又は, the English English accent と云われて居り、この事について、彼は次のように述べている。

This is the accent which developed largely in the English public schools, and which was until recently required of all BBC announcers. It is known colloquially under various names such as 'Oxford English' and 'BBC English', and is still the accent taught to non-native speakers learning British Pronunciation.

即ち、「これは広く英国のパブリックスクールで発達したアクセントである。そして、其れは最近迄、凡てのBBCアナウンサーに求められた。其れは国語的に、オックスフォードイングリッシュ、又は、BBCイングリッシュの様々な名前で知られている。尚、其れは、ブリティッシュ発音を学ぶ英語を母国語としない話し手に、教えられるアクセントである。」

R. P について、更に考えてみると、R. P は、彼の言葉を借りると次のように云える。

R. P is largely confined to England. As far as England is concerned, R. P is a non-localized accent. It is, however, not necessary to speak



R. P to speak standard English.

即ち、「R. Pは大部分イングランドに限られている。イングランドが関係している限り、R. Pは、地域的なアクセントではない。けれども、標準英語を話す為に、R. Pを必ずしも話す必要はない。」

尚、彼は標準英語については、次の様に考えている。

Standard English are widely considered to be 'correct', 'beautiful', 'nice', 'pure'.

即ち、「標準英語は広く、正確で、美しく、上品で、きれいであると考えられている。」

更に、標準英語が正確の英語であると述べている。当然、他の種類の英語については、規準から外れたものであると考えられている。しかし、言語の科学的研究は、学者に対し次の様な確信をもたせるに至って居り、彼はこの事について、次のように述べている。

The Scientific study of language has convinced most scholars that all languages and correspondingly all dialects, are equally 'good' as linguistic system. All varieties of a language are structured, complex, rule-governed systems which are wholly adequate for the needs of their speakers.

即ち、「言語の科学的研究は、大抵の学者に、凡ての言語と、それに相当する凡てのダイアレクトは、言語組織としては、同様に秀れたものである。と云う事を信じさせている。凡ての種類言語は、其れ等の話し手の必要に全く相当する作られた複雑な、ルールに支配された組織である。」

以上のように述べているが、言語の種類と正確さと、純粹さについては、言語的要素より社会的要素によって定まる、と云っており、次のように述べている。

In other words, attitudes towards non-standard dialects are atti-

tudes which reflect the social structure of society. In the same way, social values may also be reflected in judgements concerning linguistic varieties.

即ち、「云い換えれば、非標準ダイアレクトに対する態度は、社会の社会的構造を反映する態度である、同じ様な方法で、社会的価値は又、言語種類に関する判断の中に、反映されるかも知れない。」

尚、上文の具体的意味に於て、r音について、イングランドとアメリカを比較して次のように述べている。

In England, accents without postvocalic 'r' have more status and are considered more 'correct' than accents with. R. P. the prestige accent, does not have this 'r'. And postvocalic 'r' is often used on radio, television and in the theatre to indicate that a character is rural, uneducated or both. On the other hand, although the situation in the United States is more complex, there are parts of the country where the exact reverse is true.

即ち、「英国に於ては、語尾rなしのアクセントは、より多くの地位を持つて居り、'r'をもつアクセントより以上に正確であると考えられている。勢力のあるアクセントのR. Pは、此の'r'を持っていない。そして語尾'r'は、俳優が、田舎出であるか、教育がないか、又は、両方である事を示す為に、ラジオやテレビや、劇場でしばしば用いられる。他方、アメリカに於ける状態は、一層複雑であるけれども、その逆が真実であるいくつかの場所がある。」以上の様に述べているが、具体例として、

ニューヨークでは、語尾'r'を持つアクセントが、より多くの勢力を有して居り、語尾'r'なしのアクセントより正確であると、考えられているのと事であり、又、英国に於ても、場所により両方の発音が聞かれる処もある、と述べて居り、結局、次の様に云える、と彼は述べている。

There is nothing inherent in postvocalic 'r' that is good or bad, right or wrong, sophisticated or uncultured. Judgements of this kind are social judgements based on the social connotations that a particular feature has in the area in question.

即ち、「生来語尾 'r' の中に、良いか悪いか、正しいか間違っているか、世間ずれしているか、無教養であるかを示すような何物もない。此の種類の判断は、特別の特色が、その地域で問題になっている社会的深い意味に基づいた社会的判断である。」

以上のように述べて居り、結局、'r' 音の中に本質的な意味はなく、社会的判断により、その特色を規制していると、考えられる。

次に、カリフォルニア大学教授 マダレン・E・ヘザリングトン (Madelon E. Heatherington) 女史の説を参照しながら、考えてみる次第です。

先ず、彼女はダイアレクトには、二つの重要な性質があると云い、次のように述べている。

The first is that everybody speaks a dialect-or rather, many dialects. There is no "pure", "nondialectic" form of any languages. And there never has been. A language is composed only of what its users say and write. Since each individual's speech is both unique and shared with other speakers of the same language, it is inevitable that no one, pure form of a language can exist. Rather, many forms exist. Those forms are the dialects.

即ち、「第一の点は、誰でもダイアレクトを、むしろ、多くのダイアレクトを話すと云う事である。どんな言語も、純粋な、非ダイアレクトの形の言語はない。そして、今迄にもないのである。言語は、そのユーザーが云ったり、書いたりする事柄からのみ出来上っている。夫々個人の話は、特徴もあり、又、同じ言葉の他の話し手と共通するものもあるが故に、1つの純粋な形の言語

が、存在出来ない事は、必然的な事である。むしろ、多くの形が存在するのである。其れ等の形がダイレクトである。」

以上のように述べているが、では第二の点とは何であろうか、彼女は次のように述べている。

The second point is that social judgement is not the same as linguistic judgement. Linguistically speaking, no dialect is better or worse than any other, all dialects are linguistically equal. All dialects serve perfectly well as expressive and communicative devices for their users ; all are systematic, complex, functional, and creative.

即ち、「第二の点は、社会的判断は、言語的判断と同じでないと言う事である。言語的に述べれば、どんなダイレクトも、他のどんなダイレクトより良いとか、悪いとか云う事はない。凡てのダイレクトは、言語的に同じである。凡てのダイレクトは、それらの使用者等に対し、表現的で、話の通じる媒介物として、全くよく、仕えるのである。即ち、凡てのダイレクトは、組織的で、複雑で、機能的で、創造的である。」以上のように彼女は述べているが、結局、言語は文化的現象と云えるので、言語の使用については、社会的意味に於て制限されるようになると云える。そして、社会的に有力な人々の話し方を、他の人々が真似るようになり、ここにスタンダード、ダイレクトが生れて来ると思われるのであるが、この生れる過程について、彼女は次のように述べている。

The prestige speech behavior comes to be regarded as having such high social value that it is held up as a model to users of other dialects ; it is taught in the schools, in the self-help manuals, in the etiquette books ; it becomes the standard by which other forms of speech, other dialects, are measured.

即ち、「有力な話し方は、他のダイレクトの使用者等のモデルとして支持

されるような社会的高い価値を、持つものとして考えられるようになる。其れは学校に於て、自己の手引書に、エチケットブックの中に教えられ、それによって、他の形の話し方や、他のダイアレクトが測られる標準語となるのである。」以上のように述べているが、更に、このダイアレクトが標準語として定着する過程を、具体的に次のように述べている。

Eventually the prestige form comes to be widely regarded as the only right, true, pure, correct way to speak or write. If a speaker does not use that dialect, he is often labeled an outsider ; not a member of the right social group, and probably stupid as well.

即ち、「ついに、其の優勢な形は、話したり、書いたりする唯一の正しい、真実の、純粋な、正確な方法として、広く考えられるようになる。もし1人のスピーカーが、そのダイアレクトを用いないならば、其の人は、しばしば、正しい社会上のグループの1員でなくて、多分、愚かな部外者として、分類される。」以上のように述べているが、この優勢なダイアレクトは標準語として定着すると思われる。英語の場合は、標準英語になるのであるが、この発生経過について、彼女は次のように述べている。

Dialect, viewed linguistically, merely means "variant"-not good, not bad, just different. One variant in any languages usually acquires prestigious social status ; that one is defined as the prestige dialect, In America, the prestige dialect is called standard English. Often shortened to S. E.

即ち、「ダイアレクトは言語的にみれば、良くも悪くもない、単に異なる変形を意味している。どんな言語の中の変形も、普通優勢な社会的地位を得るとその物が、優勢なダイアレクトとして定められる。アメリカに於ては、勢力あるダイアレクトが、標準英語と呼ばれる。しばしば、S.Eと省略される。」

以上のように彼女は、標準英語の生れる過程について述べている。次に、標

### 言語小論⑧ (大森)

準英語にならないダイアレクトを、彼女は次のように区別している。

Non-S. E. dialects can be classified in many different ways, but for purposes of simplification, we will focus on six : historical, regional, occupational, ethnic, age, and gender.

Age and gender dialects have not been studied extensively yet, so here they will be combined into a single section. Finally, we shall return to a consideration of the social value attached to dialects when we discuss the ways in which speakers alter their linguistic behaviors in different social situations.

即ち、「非標準英語のダイアレクトは、多くの異なる方法で分類出来る。しかし、整理する目的の為に、我々は6種類に集める。即ち、歴史的、地域的、職業的、人種的、年齢と性別である。年齢と性別のダイアレクトは、広くは、学ばれていないが、ここでは、1つのセクションに結びつけられる。終に、我々が、話し手が異なる社会的状況の中で、彼等の言語行動を変える方法を論ずる時、ダイアレクトに付着される社会評価を、考えるようになるであろう。」

以上のように述べて居り、いかに、言語行動が、社会評価に影響されるかが理解出来るのであるが、上に分類された6項目について、夫々に考えてみる次第である。先ず、歴史的な項目について、彼女は次のように述べている。

By the early 1600s, the English language had become essentially analytic in its syntax. But many of the lexical items were different from our contemporary language.

即ち、「1600年代の初期迄に、英語は本質的に、その統語法の中に分析的になって来た。しかし、辞書的項目の多くは、現代の英語とは違っていた。」更に、彼女は次のように続けている。

Phonological patterns were quite different in Early Modern English dialect spoken by the first American colonists. Stress, for example,

often occurred elsewhere than where we are used to. It was on the second syllable of such words as "character", "concentrate", and "contemplate", but on the first syllable of most polysyllabic words ending in "able" or "ible", such as "commendable".

即ち、「音声型は、最初のアメリカ植民によって話された初期現代英語ダイアレクトでは、全く相違していた。ストレスは、例えば、しばしば、我々が今用いているより、他の所に起った。其れは、"character" "concentrate", "contemplate", の様な語の第2音節の上にあった。しかし又、"commendable" のような、"able" で終る多音節語の最初の音節にあった。」

又、アメリカ英語とブリティッシュ英語を、比べて考えてみると、そこには統語上に余り変化はないが、発音には、かなりの相違がみられるのであり、この事については、彼女は次のように述べている。

Three hundred fifty years and many thousands of miles have separated the British and American dialect now, so much so that two speakers of the same language from different sides of the Atlantic often have difficulty understanding one another. Syntax has not changed much since the puritans left English shores, but contemporary British pronunciation is different from America.

即ち、「350年と数千マイルは、現在ブリティッシュとアメリカダイアレクトを分離している。その結果、大西洋の異なったサイドからの同じ言葉話す2人の話し手は、しばしば、お互いを理解するのに困難を感じる。統語法は、清教徒達が、英国の海岸を離れて以来、余り変っていないが、現代のブリティッシュ発音は、アメリカ発音とはちがっている。」以上のように、彼女は述べている。以上の説は、我々も常に認めるところである。

次に、Regional (地理的) から来る相違について考えてみたい。

彼女は、ブリティッシュ英語とアメリカ英語との相違は、ダイアレクトの相違

として残ると云って居り、その理由は、言語は本質的に相互に理解出来るものであるからである。と云っている。

又、アメリカ英語については、彼女は次のように述べている。

Southerners do not sound like Northerners, who do not sound like Midwesterners. Regional dialects, however, may be among the least susceptible of wide-ranging study, because America has become such a mobile society.

即ち、「南部の人々は、北部の人々のように発音しない。又、北部の人々は中西部の人々のように発音しない。けれども、地域的ダイアレクトは、広い範囲にわたる研究の中では、最も熱の入らないものの中にあるかも知れない。なぜならば、アメリカはこのように、移動社会になっているからである。」

以上のように述べているが、では移動社会とは、如何なるものであろうか、この事を具体的に考えてみたい。先ず、彼女は次のように述べている。

When the population is stable, it is relatively easy to draw up maps of the regions where a clearly distinguishable dialect occurs, much of the Midwest and West, settled by people from elsewhere, is difficult to map.

即ち、「人口が一定している時は、はっきりと区別出来るダイアレクトが生ずる地域の地図を画く事は、比較的容易であるが、他の所からの人々によって、居住された中西部及び西部の多くは、言語地図を画く事は困難である。」結局、アメリカ社会に於ける人口の移動性が大いにダイアレクトに影響していると云えよう。

次に occupational（職業的）な言語相違について述べてみたいと思う。

職業的な差異は他の要素と違って、地域差等に余り影響がないようである。特定の職業に従っている人々は、共通の特定語を有している。この事に関し、彼女は次のように述べている。



When occupational dialect is designed to convey specialized information in a rapid and condensed form from one member of the occupation to another, it is called jargon. Although the intention behind the use of jargon is to be concise, and not necessarily to confuse non-members of the group, sometimes jargon can be very obscure to those not familiar with it.

即ち、「職業的ダイアレクトは、速く、縮少された形で専門的情報を、其の職業の1人から、他の人に伝えるようにつくられる時、其れは、ジャーゴン(特殊語)と呼ばれる。特殊語使用後の意志は簡略されるけれども、必ずしもグループの人々を、混乱させるものではない。時々、ジャーゴンは、其の語に慣れない人々には、非常に意味があいまいになるようになる。」

尚、具体的に考えてみると、日本に於てもスポーツにも特殊の用語があり、又、病院で使う“クランケ”(患者)、警察で用いる“ゲロスル”(白状する)、“ヤマ”(事件)、又、すし屋で使う語“ひかりもの”、“とろ”、“あがり”等がある。尚“やくざ社会”で用いる特殊の語もある。

次に、スラング(slang)について考えてみたいと思う、彼女は、この事について次のように述べている。

Colorful language-not swearwords, but new terms or long used words applied in new ways-is called slang. Slang is easy to recognize, but almost impossible to define in such a specific and predictive way that anyone could determine in advance what a slang word would be.

即ち、「暫いの言葉ではなくて、新しい用語や、新しい方法で用いられる長く使用される語である生き生きした語は、スラングと呼ばれる。スラングは認知する事は容易であるが、スラングは何であるか、前以って、誰でも定める事が出来るような特別な予見的方法で、定義する事は殆んど不可能である。」

以上のように彼女は述べているが、では、定義する事の困難さは、如何なる

ところから来るのであろうか。この事について、彼女は次のように述べている。

Perhaps that difficulty in definition comes from the fact that slang is intimately tied to social respectability, and definitions of "respectability" change from day to day.

即ち、「多分、定義する事の困難さは、スラングが社会の関心度に、密接に結びつけられているからである。そして、関心度の定義は日々代るのである。」

以上のように述べて、スラングを定義する事の難しさを述べているのである。しかし、標準英語スピーカーは、スラングを俗物視する傾向が強く、反面、この事は或る程度、社会的要求に応じているかも知れないが、この事について、彼女は次のように述べている。

Although many slang terms become part of the main stream dialects for a while, they were originally intended to divert main stream, S. E. attention.

即ち、「多くのスラングは、しばらくの間、主流ダレアレクトの一部になるけれども、スラングは本質的に、主流や標準英語の注意から外れる傾向がある。」

スラングについては、以上のように述べているが、外に、ブズ (buzz) がある。彼女はこの事について、次のように述べている。

Like slang, buzz words frequently become fashionable among the general public and are worked to death. Any nation wide preoccupation will produce a spate of buzzes, which may outlive fashion and enter into S. E.

即ち、「スラングのようにブズは、しばしば一般の人々の間で流行するようになり、そして、活動し消えてゆく。何か国民的に広く没頭する事は、ブズのほとぼしりを生じ、そして、其れは、流行するのを長生きさせ、標準英語の中に入るかも知れない。」

次に人種的 (Ethnic) なものについて述べてみたいと思う。先ず彼女は次のように述べている。

Ethnic dialects are probably the best known and possibly the most ridiculed. They are vulnerably obvious in their differentness from whatever that mythic, pure American S. E is supposed to be, just as the ethnic-group members are obviously different, not "American", somehow, but hybrids. : Spanish-American, Italian-American, Japanese American, etc.

即ち、「人種的ダイアレクトは、多分、最もよく知られて居り、そして、かなり非常に嘲笑されている。其れらは、あの神話的純粋なアメリカ標準英語が如何にあるかを云う事から、其れらの違いに、神経質的にはっきりしている。丁度1つの人種のグループの人々が、アメリカ人でなくて、とに角、雑種であると、はっきり違っている如くである。即ち、スペイン系アメリカ人、イタリア系アメリカ人、日系アメリカ人等の如くである。」

以上のように彼女は述べているが、この人種的ダイアレクトは、各人が母国語を、英語の上に重ねるので生れて来ると思う。日本人の場合は 'l' と 'r' の音の区別が難かしく、又、中間母音 'æ' の発音も下手である。

次に黒人の話す英語について考えてみたいと思う。先ず、彼女は次のように述べている。

For a long time, the dialect spoken by many black Americans, it is referred to as Black English, or B. E, was assumed to be a corrupt or deficient form of English, as all other ethnic dialects were commonly supposed to be, But many studies undertaken in the past two decades have convincingly demonstrated the falsity of that assumption.

即ち、「長い間、多くの里人アメリカ人によって話されたダイアレクトは、

これはブラック、イングリッシュと云われ、B. E と略するが、凡ての他の人種的ダイアレクトが、普通考えられている如くに、英語のなまりのある形が、不完全な形であると考えられた。しかし、過去20年間にされた多くの研究は、其の考えの間違いである事をはっきりと示している。」

更に現在のB. Eの発展過程について、具体的に彼女は次のように述べている。

B. E is strikingly different from other ethnic dialects. B. E apparently had to be built from scratch rather than acquired from an already existent speech community. Black people who spoke many mutually unintelligible African languages would be thrown onto slave ships, unable to communicate with each other or with the white overseers. Once arrived, the slaves eventually contrived a pidgin (a madeup, compromise language composed of scraps of this and that language). A pidgin learned as one's native language is called a creole. The creole or pidgin may have been Gullah and may have formed the basis of present-day Black English dialects.

即ち、「B. Eは、他の人種的ダイアレクトとは、非常に違っている。B. Eは明らかにすでに存在している言語社会から得る事よりも、むしろ、かき集める事から作られねばならなかった。多くの相互に理解出来ないアフリカ言語を話した黒人達は、互いに、又は白人の監督達と会話する事も出来ずに、奴隷船の上に投げ出されたであろう。一度到着するや、奴隷達は、ピジン<sup>(6)</sup>を工夫してつくった。(あれこれの言語の断片から組み立てられた、つくり上げられた妥協語) 1つの母国語として覚えたピジンは、クリオール<sup>(7)</sup>と呼ばれる。クリオール又はピジイは、ガーラア<sup>(8)</sup>であったかも知れないし、そして、現在のB. Eダイアレクトの基を作ったかも知れない。」

以上のように彼女は述べて居るが、更に、B. EとS. Eとの相違について、次のように述べている。

Like other nonstandard dialects, ethnic or otherwise, B. E differs from S. E. phonemically and lexically. There are comparatively greater differences between the syntax of B. E. and S. E. than between S. E. and other non S. E. dialects. These syntactic variants are quite regular, of course, as dialectic differences always are.

即ち、「他の非標準ダレアレクトのように、人種的にも他の点でも、B. E. は、S. E. とは音素的に、辞書的に違っている。B. E. と S. E. の統語法の間には、S. E. と他の非 S. E. ダイアレクトの間の相違よりもかなり大きい相違がある。此等の統語上の変形は、ダイアレクトの相違が常にあるように、勿論、全く規則的である。」

更に、彼女は具体的な例を上げて、次の様に述べている。

Characteristic of B. E., for example, is the elision of be-verb constructions and plural markers common in S. E. as in B. E.'s "They going" "we cool", and "I hungry", or "two brother", and "seven day".

即ち、「例えば、B. E. の特徴は、S. E. に普通用いられている be 動詞構造や、複数形 S の省略である。B. E. に於ては次の如くである。

"They going", "We cool", and "I hungry", or "two brother", "seven day".

次に、Age and Gender について述べてみたい。この事について、彼女は次のように述べている。

Age and gender are primarily biological rather than linguistic circumstances, but people of different ages and different sexes do learn different dialects. Like other dialects, these intersect with each other and with nation, region, occupation, and ethnic background.

即ち、「年令と性は、元来言語的情况よりもむしろ、生物学的なものである。しかし、異なった年令や、異なった性の人々は、異なったダイアレクトを習得

### 言語小論⑧ (大森)

する。他のダイアレクトの様に、此等は相互に、そして国家、地域、職業、そして人種的背景と交差する。」

以上のように述べているが、此等の具体的例については、別の機会に述べたいと思う。

次に、ワシントン大学教授フィリップ、エス、デール (Philip. S. Dale) の説を参考にしながら述べてみたいと思う。先ず彼は、ダイアレクトについて、次の様に述べている。

All languages often serves as a barrier, rather than as a flexible and efficient means of communication. We do not all speak the same language. Even within a particular language community, individuals do not speak in exactly the same way. Such variations within a single language are called dialects.

即ち、「全ての言語は、全くしばしば融通性のある有効なコミュニケーションの手段としてよりも、むしろ障害物として役立つ。我々は凡て、同じ言語を話すわけではない。特別の言語社会の中でさえも、個人は、正確に同じ方法で話しはしない。単一の言語の中の、このような変化をダイアレクトと呼ばれる。」

以上のように、彼はダイアレクトを説明している。尚、ダイアレクトの相異については、彼は次のように説明している。

Dialect differences arise whenever a group of individuals communicate more among themselves than with individuals outside the group, at least on certain topics. Thus dialects of a limited sort often develop on the basis of profession.

Different occupations have different things to talk about. But, the same concepts will be labeled with different words.

## 言語小論⑧ (大森)

即ち、「ダイアレクトの相異は、1つのグループの各人が、少なくとも或る話題について、そのグループの外側の各人とよりも、彼等自身の間でコミュニケーションする時は、何時でも起こる。この様な限られた種類のダイアレクトは、しばしば、職業の基盤の上で発展する。異なった職業は、異なった話すべき物を持つ。しかし、同じ概念は、異なった語で分類されるであろう。」

以上のように述べているが、更に、彼はダイアレクト相違をもたらす物として、前述したような年齢、社会的階級、人種等を上げているが、彼の所説については、別稿で記したいと思う次第です。

---

以上三人の学者の説を参考に論述を試みた次第ですが、如何に言語が、言語的要素よりも、社会的要素によって強く影響されるかを、標準英語と非標準英語、ダイアレクト等の問題を通して述べた次第です。

### Notes:

- (1) ピーター、トルージル (Peter Trudgill: 1943年英国のノールウィック (Norwich) に生れる。1971年エジンバラ大学から Ph. D を得る。専門は社会言語学。現在リーディング大学教授
- (2) マダレン. E. ヘザリングトン (Madelon E. Heatherington): カリフォルニア大学ロスアンゼルス校英語科教授
- (3) フィリップS. デール (Philip S. Dale): ワシントン大学教授、幼児言語学専攻
- (4) autonomy (自律): 一般にある文化領域が何か他のもの手段ではなくそれ自身のうちに独立の意義と価値をもつこと。
- (5) heteronomy (他律): 自律に対する語
- (6) pidgin (ピジン語, 混成語): 外国人同士が互いの、あるいはいくつかの言語を簡略混合して伝達に使う補助言語である。発音文法は相当変差があり、各言語に共通な文法を選んで使う事が多い。
- (7) Creole (クリオール語): pidgin を生れつき話し、自分の母国語として使う言語集団の場合に、これを creole と呼ぶ。
- (8) Gullah (ガーラー): 一般にはサウスキャロライナ州、ジョージア州、フロリダ州北部にわたる海岸地域、その地域に住んで居る一部の黒

言語小論⑧ (大森)

人が話している言語。

Bibliographies :

Peter Trudgill : Sociolinguistics, An Introduction, 1974, London, England

〃 〃 : Language and society (edited with notes by K. Awaka) 1981, Tokyo

Madelon E. Heatherington : How Language works, 1980, America

〃 〃 : How Language works  
(edited with notes by H. Kodama) 1981  
H. Abe  
Kinseido, Tokyo

Philip S. Dale : Language Development, 1976, Holt, Rinehart and Winston, America

〃 〃 〃 : Language Development : Structure and Functions, 1972, Dryden press, New York